鶉許呂裳

後編

拾遺

歎老辞
隠居雑
自伝説
雪舟序
吊不幸文
騎鶴楼記
四季賦
剃髪雑
鐘馗画賛
脇説
賛補破茶碗辞
脇頌

うつらう衣笈編纂編続編とて二無数巻
大言をあつめ今を後編
拾遺乃ち油をとる名とく舞ひよく
あきなひ乃ち多ひ名づく前姓ハ横井氏ちなし
時般まこと並明と称し又ハ寧と称せ
暮水と称ちなの号をや有ちなの哲と
義侯と称ちなの養成半掃と以人尾藩の
世臣なり

四人亭主人

うつゝ衣 後編

歌老辞

芭蕉翁は五十一ねんく世をさりなれば浪文を名残
難波の西鶴も五十二ねんく一期と終りなれば
来二年の辞世と残せり是虚弱無力なる我の
年まさるこゝにて今年の秋と云ふ第義の
中間なれば第義人々の逃るくがたきはいつくにか
世をさりなんやと思ふ事なれば
歌ばかりまれなる世に立ながらんとなれば
歌もまれなりゆきて松と黄ばみ枯て一生
つらなりて第義人々あもいやうきしとなるべく
うちつゝまれとも再うつくしき世を出ずして無為

ゆゆしきさまにやまき當時のもやう絵をもかきたる
行のゆゆしきを根岡氏岡とつくりて枕草
拳酒もさらにさいへ遠さにはは奥の乃ふ兵一人
火燈蒲萄の酒やもとりてあしかりしいまいまを
とゝめふ苦ろ人ゆ赤ゝとれいてもゆのろけ
あまいろのかくしたる六十の老とまふものて山國の
軍にしたい五十の底ふあ　ろいしく三ケの津乃
舞者ーまらもいつまの老と欲ものあるふも
海ろうもかし仙ものいまの今のかまさろしものを
老人ーてに苦ーさらいをのんの悪ろ者い深ふ
面白ろ者も今のいろ乃ろ面白ろ者ゆ昔我ろ
面白ろしかろ者ろ者ゆ者ろ者ゆ者我今の

ものしむへき身のとき而ものやゝ白ひわゝ白ふろ
身の老を惜さしなる者ろくもふよのーま次ろ
身の老と思ろまを例の人ゆいやゝまをあるみ
なき酒色のよふあやもちゆをんされは老
ろまをゝ又老い意ろゝ次二ケの焼酒をゝ
はゝ今ゝ遠業の店をさらんに不老の
薬いろを切ら不老の薬ちろあるとろいを
一ケ百十錢ろもも不老とをかく行の老ろ不老
あくも不老あ成十日ろも足れゝ神仙
不老行ものとる成ものを杜風ふ向く感慨者を
剣子剣ものをゝ剣ものをゝ剣ものをゝ神ろふ
人ゆきをのもの者ゆ者ゆ者好ゆ行ゝ四十

[illegible]

四碁賦

琴碁書画の沈淪なるべくこゝろあるべし詩歌
[illegible]琴にてこゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]十三絃を[illegible]せきに二十五絃のいと
[illegible]

琴と碁とは[illegible]
指の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の諸物の等相なく七世孫あひ伝へ
年月の別なく悩さへまるものなくうんい
なきなる根ゝ[illegible]我ものゝ不機根めく
仏祭とゝもゝ[illegible]ゝ恨なきて[illegible]
ぬこゝふあ[illegible]きゝ夫と[illegible]
詩歌文章[illegible]なく[illegible]
可世の[illegible]
本ゝ[illegible]用ゆ[illegible]
仏法[illegible]十文と定家[illegible]様
又い世[illegible]利[illegible]
文徴[illegible]
[illegible]

あるまゝにおもひ[illegible]
紙筆[illegible]
こゝゝ[illegible]
思ふ[illegible]
男い[illegible]大津絵の元祖い肥く表彩
うき世絵の文平に[illegible]
いゝ[illegible]
能[illegible]人[illegible]
[illegible]
遠水ふ波[illegible]遠人の目鼻あ[illegible]
[illegible]
俳諧師の[illegible]

江とのこしの人い我も我流の学問をしてあるく
僧も俗の宣賛をうけは緞帳をかけてこそ示
ちうあるへあるし恥をぬすむるとうすす
ちらしはいまもしと古田の法師と云ふる者の
ものも無年比の法の法師と遊ふるものとあるる

源五雑

箕山の月いうしく立源のあと海
しく霞うしく垣八幡酒の儀まとも大源の
市もしへうら菴い英稲の法よまとのかと岩の
隆数ちうし浅しまかと昔の源者とも宗徒る
人の世ふもうともつしかう仇ある人の敵と成て

さてとも色をもつへうとも思ひうあ徒まるく
仇するきへのうへ四条五条に金銭賞物をもし
ちうとも宮きしの人をもあさまるき人か
うもしきも世ちしもよれ拾ひのかくまんの尋る
思のあはしてあまさるとうき世ちく鬱也
中くちつうき光をちうしてや世ふ源五乃
二字参ちむちみをいたちうきかの月さうあと
門い蔵に関を世かうたちうきかの月さうあと
ちしさいうのうめ人ふあうしとと海
おすうこふあう源五ちう軽を初るを
ちもうあうもうもしい修世をもちしめく人とと
あが仏をちらへ力にしとく思ふとけ

さもなくば命つまき人は初の宣寝の夢つ
つくしまも能けは次第にさもなくくるし
くなりゆくあり三月の夕暮
かすかなる世中の清あるにてもなく昔
なりしは始めは人々あるべし花山の上皇し
るるときなれども世のひとりさらに小山の神景
もいとゝ清の清るすがたもいとゝ
なりまれは始めもまくまはくに山をるき
るもなりすは我身の上をいかゝしき陰を
教なり及ばに立しもなくれもなり毒も
薬もあるは人あるまに身も定すに雨雲の
あるを深くしるすあるを雨は影まるは

世の人は我もあるとは思ふるやまされ今いかゝも
しらくるあるをくさてもとのふの名
すまを人は南部の年を作ん世の人のの
なりまは老を病を一筋にてしき世貧
のれもあるは走まは誰をあれのを能く
さの逃しくもまは又世顕の門を
桃は昌蒲は神の陰のこの
法のあるはくるの陰のとき
稀しれはいとふるとき世の庭をまは
まとふるとき遁世者の庭をまは
源氏とはいとれさるを物を
通称とはくの灯桃竹の名の郷は

されば世は萬きるものはありよめぬをよしとしたる事に比
いつくの程より市中の門柱に隠居某と書られ
あれどもみなこれにも志もろく国もしる随ひしゆる
今やそのようなるわれをも隠居しらる限んとよく
者らしき隠居は又及もせうしき人にまされてとやかれ
門出あれこそく市のけしきのその〔う〕き世よりや
かしくそれ文海世次いまたつくたるく家で遊
門さらせて相まうに人を驚かし　隠居の名は
いましきはおしろきる世のさ母ろ地やいとげく
食傷して　於よ人のよくひるべし
四角なる浮世の性屋は来まひら

剃髪辨

さて天地の間その理あらく姿あるべくもなくして
頭髪はあるべし　いつや世とのはじめより世の名を
あらためんはその姿まんつあらさらしば今やさの
やまの世の男女やかみそりは神儒の朱髪は似せん
釈氏の剃髪なりやすらんと模様のあふの
うつそあぶなる生涯の仕上なれば一大事の剃髪
あらまほしもんげいまのなくかの言義乃
よあしもやうちは只あけくれの自由をとるいは
髪あつくこれは是て以ふ橘洲の跡はあらま
ほしけれはそこの形を吉田の法師まで〔え〕たまひ
いらぬ所まではさまあつき此頃る紀行をみせたるを

かゝることを見てそれ為の師匠のうまれ諸小乗仏教と
いふものあるべきもやうもなくまことの仏法のおこる
機縁は拙僧ごとき拙僧に酒つくることを仏法とする
べしとのたまふことをつゝみ隠さず剃髪
まことにあさましき迷昏の凡夫なれども今
世にあるまことを宣旨の強難をこのきこえし功
ことをもつて名をとゞめられるきこえ恥のきたし
こゝに今世俗の身をもつてきき浮世の塵と剃髪
いとそうまことに出家とんやうれしてしかも極のひ
ものあることをふかくふかくまことに儒者の説を
うけいあまり機縁のとゝまらぬ父母の遺體とも
なるべきこゝ一朝の怒を喧嘩と思し

二世の禁を心中をくらして我とうらみを出せる
ものをもつてるものの存生にさとる教ものをもつて
現在十家婚をもつてけくを存ずをもつてきず
婚をもつて仏と為かくの如く髪をもつてきず
うき名をつゝみかくしてくうめぬ
ものの上をもつて双親世を師匠はたゞ
剃髪の宗をおもせ
ゆるものあるべくいまこゝの世をいとこゝの
よくこゝを考へるべしこゝ仏法世のつゝみ事我
慢をいつゝいつゝの遺體をはぐくすを
ゆきこゝいつゝ考へ釈ゝ迦如来
出れば拙僧の説をもつて先ゝうき世をうとまれ
ひすてまつる色乃

ことさらになりやあらむ されはこそ今は醫者も法師も
剃髪して 妻帯はあらはにしられ侍りけりまして
其うちなる法華経の八巻の中には四部の弟子の
比丘尼とあつめて比丘と優婆塞と入室在家は
其の名あらはれて出家の生とも尊人とす志ありて
併もあらはれらの国利にも出家を妹にせしの世
なき時しもましくまてある迄道にいへるほいは入道とも
いはく人を名ねて法師なるあるは禅門とも
坊主あるまゝにしらるゝは世の作かはり字義には
ひかへす湯茶をあたひを沸せしもその名は薬籠と
よまれ薬をもくに用ぬは茶碗は菓子の名を
のまゝせきたれは容のあらはしきなる妖物ね凡かれ

かゝる書ものへてふこも坊主入道の號あれも我を坊主とも
法師ともよひてよ人に假へし
剃そくしたる同時にまゐこてるの影法師

自名の説

遁世の名をまてに定りぬまてなるき世の名にも
あらしきの二字にあらされはやゝと名を知れひ
字を名とせし今は父母も世にかはりて友垣をいふ
離されたる忠孝の字義をしるしも設の書くやも
いかなきよ文四書古文の樵書もあまたく
人の取もし傍にて随心集のこゝろをあら
ゆる隠居のむつかしきに貫きりて喉ちかしける

さるハ博識の門にくゞりて意味深長の二字をしらざる
あるまじきなれども吏ハ耳遠きゆゑ気いつたと問
笑ひし人のまた仏頂顔のはなはだしく云○顔乃
診察させ仏説はまことにその士のむつかしきを
一人にて講釈せんといふもつかしからぬ一菩提
の花も跡絶へは西念浄蓮とてもかへつてすまぬ
世の人のうへをあやしに金銀をもつて貧に貴を生
百者も不承ハのぞむ手をもつて下女だになくてよ
つけてよし風重し気はその人によりぬとそのためにし
まことは老を嗣市ハジメ女と覚えし娘が娘をいかさます
ゆゑにいとはしき人のすきな酒呑の亭にかゝりせよ
さる善水とふかしめいるぞふかく人の使ひを

これハ鉛のんだくされハ山猫にしたがひしに蛇に
足をそへ猫に木登り教へるはづかしく自然とうき
字義にもかなひぬれも文なしとやいふべし
画ちかきハ画ちかきに似たる気配に

鍾馗画讃

邑をまもる家あるし　いつこれ鬼をまつらん
素人絵の幟にかゝれて　あやしき刀をひらめく
疫神除の札に押されて　ひいらぎも門をまもる
其剣と猫に木登　つかにいまだ鞘をさゝず

雪靖亭

こゝに前津の里に世をのがれて秋の月は心なく
ちりゆくすゝきの山路の鄙もなつかしきにまかせ
行きのこゝちにうつしゝ我も老ひ人となりゆくや
雪月花は必ずともにしへくてあはれを
そのうちの火燵のもとには林下なんといふ一人を
よろこびし詩人のひとこゝろのもとにまかせて
花ひらきよし木の葉も志くれもうき世して雪ふる
庭の中さくれともしきさらにものゝうち散と
葛飾にかくれしちまての雪の粧つかなしき花昔
より雨を語らふもしうめく神仙の四ヶ家
の術は其傍ら俗の法力をあらはし雨は小町の家を
児女の読もつたへくおゆるも其理屋にとゞめ

祇園の天保は古書に見えてくものこときたる
雨は五穀のためにして雪其も○の瑞となれば
降りや雨を語らすれば雪ゆへ次神
なるよりむかし歳燈あれは俳諧も懐かる
ものやいてもあれけがたくしも柏琉のあたゝかく
ゆれくも粉雪の法のりを見るもおのゝしと
為りて雪月の日をまて一句を口ずさみあまた
半掃庵の雪をさめむや年比の俳諧も俳諧の
内のなしもあまりうたゝし力をそへておくりてまへ
こゝは不易庵の老和尚を先達としてかの
去歳とうらひは丹孫を抽くて一枝火燵の壇を
まかり雪請の一堂をつと傚しぬる

[illegible]

脇說

世を捨てる法師の物ものしく人とし[illegible]
[illegible]地する[illegible]
[illegible]氣にさ[illegible]あつの慕[illegible]
[illegible]なのてに[illegible]
又[illegible]物とまこと[illegible]
[illegible]我いく世い捨[illegible]
祿を無[illegible]
凍餒の患いいす[illegible]
[illegible]を[illegible]子風のものを[illegible]

[illegible]
[illegible]を限[illegible]只一風の物の
[illegible]一物[illegible]多風[illegible]
物ゑ[illegible]定[illegible]煙[illegible]
[illegible]巾[illegible]清[illegible]中焦のやく[illegible]
[illegible]一物に[illegible]多風の省略い天地
[illegible]冥冥[illegible]清[illegible]今[illegible]異い呼吸[illegible]
物[illegible]く用[illegible]物を飲食[illegible]
用[illegible]天[illegible]人[illegible]
異[illegible]人[illegible]二の
の[illegible]冥帳[illegible]は因果物德
天の[illegible]
乃[illegible]

則つく聖人是を知ゆるの所なるの中に
俳とは蓮生法師なくまたく義のごとく
ともかく法師の義を過るをもて久しく
不審の時なりしかるに今はかつてこれを考ぬ
はかる天地万物の時節なきこと是芭蕉
なり一なるこの理いまだ我くわの不用を
いまだ解て考ずしかるに又いまだこのことを
料紙や一つのものにかくまてきれもあんなるなり
調度のごとく是に結ぶ一の風流なり是は組立の
面白一なるこのことをあるにのみなく
ともかく人のなるものあるにのみなく
ともかく人のなるものあるにのみなく
つ二つとなるのつるいまるる法なるいまるも

こゝふ世のなるを思ふもの一面の種蒔
とゝのまたく根の樹を植てはやがて花実に
なるなりかくなるこゝろ人の永をもて
俳を主とあるを於軍あるへつらんなるもを
横ゆるなるいまるくてこゝ表れるくいるき
なるこゝろいつもこゝ樹へ出るなるもつく
彼をもつに我ゆまく斗樹の永なるなる
なる様と命をくまたこゝふ人のんをもやう
こゝ是をこゝの俳をこゝろるなるを豈俳
世界ふあるこゝろしや

第不要文　貝六林

哀まけや多たあらさま上は多れんを志ら次魚
おさされし魚の心をもらは君か孝女をも失ひく
甚之の涙袖を濡し古備のいまみ襟に満たり
さしめく知ると云へ八十のかねさせしらきらい
例の天命を後すき哀しくもやつて後家と志ろく
岩憂のおをすめ日々あまきめよ忘れよと君の
りしを思ふるのを人の言しくいうま世乃
義理の薬施を總るある樹木の葉子為り
古にもとぞつる依泥るんいて鰥花に涙かうん
いそ栗柳に悲をゆきられ果に当入のさうぞうら
懐をとるらしくすきひ泣とハ是をもしいつめや
是をしるふしてを思を弟かる我すきたき比十六の

孝女を先へ七りされハ君か心我しく志らぬ君丈
さらめく我を案せんし我かの愚かしく魚を
いよしいふけきのそしりや欲きしあやなけき
おけなしくまくゆるにかんまれ森に枯かけたる
枝の葉乃ちるはちを見えうし七々の日も浮すもれ
万行の涙千行に満し百ヶ日の墓参にハ百行や
十行かとくやしさく一周忌のかひ鐃はなの丸
定の腸ハ断ても砕けつけく完了をいふし
されとも徹の孫をおきへ桃に離の袂ひ日にハあう
ましらの怨いひをまする血の帰の身柏子ハ人志服
梅よふへて汁かしみハ一生れ病なると思ひの久
まれ子の親をうしおひさしそまれし調度

同ふあてこ第示ゆてもくとてこるすは見とそんうはよつけく去ること云まてこふまる乳
今異の新くしくしい世の倒の別るまは世のこせ
爲の沿と異こるうてりやう樹ふ新しこのも出ふ
うらくこく児女乃態てれるしのしうく去こく
弄く注ふ乳爲るいまをするしあしゆうこを噴我
今先達乃新しこて弄をいるし弄ふこ先達乃新く
毎のあるふ弄のこふをいるしきこにあこ樹の義を
来ふこあるきこるこるるしこるるしこる

辺の厚先こいこる秋のこら

賛補破茶碗辯上

大極の氣二ふ破ふく法陽こるこの法陽の
又あこふ支婦いり世の数こるれるあり
ゆ茶碗のまこに命月のくるるきのこふこ
ふまてくこ碗の盈虧をゆ一舎者定就を弄
こくこ新らるの文あこを佛ゆ我を新き
衢ふゆこるの文あこを我ゆ求む我田先生の
言にまけ見驕い壯るる附一日ふ千里をこ
先こい駑馬と先こふこまこく駑馬の死る
ふのふのいこるこるこ考しこもくここ出ふあこ
護花園あこここ一人の好事あり加こふこく
求む一あ好こここるるれ出るあくと
あこふ先こく我い中糟の山にくれぬこくこふ

其文成まて姫の茶碗のあやまちに幾ちくいかに
ふつに敲くれたり果して金玉の響あり誠に
茶碗の名をいはゞ此文あしきをあさ丸の太刀蝶蜂の
角もその瑕あらく瑕なきは紐目をいとふなる也
嫦娥か天上の藥はいさしらす人間に石くらしと
いふものなりけりや

きぬれたる継はきぬ色て其つけ哉
破れ世の中かれあれとも

贈平菴文

平易を好く其分を治れは是を称かなし
けらし此菴はいはれなにしく呼て餘生をつく

さしもへき垣越の萩をかうしのあるし山県の
孫なるぬしや謙あく杯のこゝろしここに建なかれる
いましむやみなんむつとしやいつかはいさあるか
ふいえるをきれと東国ハすとのかなにして其庵
とくも月かん川嶺ハあらし方なる廣き宮の
庭のうハ一所ちらうもとめへしこゝに一句をとゞめ
をりまて四時の多景物をなつまはかくいゆへき
さぬと庵のうちきよしとてもあれとつまなくいなひ
うらくは只眼前の姿をいふ

絵の中にうつくしきのあり

とふく下あそしに掛たるしの自由ありき春は
田州礼とみえし夏は中菊乱秋は木ありき気秋

大根にてもなくて一物四周にたるきあり板
角のつるきといつべうもなく板の一枚にまきつけ
おもて物をいれるなり

麻頌

麻を不用の物なりとは我も詩をもて人の物なり麻
他の一寸いつべうもなく一尺いつべうもなく世にやくるき
ものなりもしもいまつ麻の布をつくれるもの
麻い物やいかに素餐の詩なりさらい物やいか
二絍の錦をもて及ちすもの世にあるとも物を費
もてもて他人の支體を不用を論ずる男の
乳をもてもているる義のあるもてもてなる今更

こまつらとて掛ける服は渾沌氏の面をげしと世に
もてはやるきこのあるこ いてうの麻い頻死者病世人
るるきこのまづもてもく長ふ矣もてる時は泉下に黄泉
尚ほ多あり多多 物もて板のさまにまるいあり
もてもてみひろもてもて項羽の山を拔く力を叶垓を
重瞳忍一族つもて痛悔麻をかもてもい漢文乃
古詩にしく我朝の人を嘲るもてもく麻の笑ふも
いつて多きもてるにつまりもき沼岳あつて麻もて
いを海まもしもて天津宮の清祓もこのもて
ちもくいつでもて抵もてもてるもて女こもてもの氣
つもてつるのい麝香の狩人と陸もておもてもて
牡丹の花もてもて麻の績小注年の芳を

情田宮神をあがめまつりて耳も及ぶ事も及ばれいかく風雅あり大功あれど今の我身を給ふ人
されど稀にまれなるかぶ立人津くくもつまりて又
勝のかぶいかんかぶ場ようもて始まりて
あるもとまるに天に二つの月ふく際二つの稀なき
きれとよりの月宮いやめてりつより只まを
てまなかしとて

友とせし稀拙いつる秋の雲

金嶽樓記

樓朱色にして嶽と金嶽とよつのいつみ名ふき
富士ありしをみるへてなりしを山樓の眺望東南と

ひらけられたかの金嶽の一つなる所なり里吟瞬の
間にあり此あり村落あり神社佛閣のこるあり
なく西ふ流く西ふ及へる竜興寺に詩吟
しく紫色雨を催し一桜山の桜の花雲き
月を望くもるい鐘ふもつく名てて達ふ高雲
跡をあつる世は上ない酒のゆうをふ麹池ふ
涎を流すしてしたるを主翁文章に富もて
こるふ年ふ遊ふ者ふ皆一所の英才ふく新詩
百篇瞬くうちあるこ雅談一日あくびをもらもて
拙ふ好文の節をこるあ向ひて笑ふ詩天は
文の徳星をこるを定むるん玉を綿
るるくこうきをあるし詩歌の花ひ小鳥を楽ふ

俳諧の文と語つて甚だいとやさしく知れぬ程なを
拾ひとく主を踏きあくとしてあく海を流しむの
ものとなりぬ不才なるものを以て頑なあく俗を
言て庶汁代むとなる我賀もるものあり世に餐の
桟浦の幕毛毬小鰐をもつて撰並一日軍を
ものすい其ものを訪いくるなりしは山深にされは
山樓小屋に樹千年の久しきを期をして
まるものの動ふくるもの滑らぬ
名山の形なるものをあるしを者をもつて
幾代の齢をもつて辛あり山樓小屋に住く風ふ
於てもく登仙せむとあり我居し幸ふて五十
の七翁の歌あり法のを衣の名利を厚くを

其日の借あいをつくるとて
月並に寫せるる同の餘り

編笠賛
杉の門序
盆石記
六十齢説
樂舎銘
澄光井銘
四季亭記
李号説
幽栖説
與時齋銘
悔子禮文
東岳頌
頭陀法師
岐遇賦
六林文集序
聯句並引

編笠賛

迹を深山の雲にかくし南一方を蓬生に隔て
て世をも遁れ人をも避ん為にかぶる人も多く
あるゝ蓬莱の浦形の鬼の持る宝いまゝ丁昔
時州の隠形の秘術と伝へて世に編笠といふの
あり是を載いて出る時は車馬絡こゝ市中を
あるけども人我を見ることなし朱雀の名人し
日本堤の曉いまだ十こゝのきに人ゝ多く行る樂
節季はの世をもゝ遥うしひとみ賞もを人の果を
みるゝまゝ半後通用の宝ものゝ今春年世中六

妙珍まことの樂とも其德をるに優ること無し
たゝしは女はゝ次出家の次第をきゝ
よみしいと相編笠をうく俗をうく望て法華部
仏とゝなるべきあるべし
順誠あり其の命あるべきもの孫の多く相
乘大納言の名きこえ市茶屋の焼印
しるべい世あるけれども相撲帳紀宝物
ゝ腰とゝ和歌あまたも金銀乃ゝ
つれなくとゝ歌ゝいつれも深泊の落国を
ゝつまゝゝ出ゝ相編笠と張ゝ
ゝ相編笠と張ゝ破ゝ衣の先達を
ゝ俗ゝ疾風動揺ゝ松の風ゝ

ゝけゝいゝゝ
ゝゝ縁譲ゝ新ゝ
泊休ゝ藥ゝ費ゝ
我新ゝ世ゝ一巻ゝ大阪ゝ
安く新市ゝ

編笠の俄張者や　年乃市

迷妄說

鬼一口のいまゝゝ妖物の中一ゝ　もゝ迷妄
ゝゝいゝ者ゝ安ゝ　ゝ紙ゝ
紙ゝ廣納のゝ竹杖ゝ
下ゝあゝ

子細らしきを雄蓮華と雌蓮華とを
雌蓮華とを
多くの経を取て或は剛なる侍をつくりて云ふ
いかに白く白く白くの国もなきかあるかなく女やうを
おもしろきかの木のを蓮華のつくるつくるつくるや
人形なく蓮華の自由あるは佛菓を法ぬ亡者たち
我もしと云つくりまく訪ひ弔ひのあつくへ自論
かくく言葉らるゆ花のつくるを藤の紙花の蕊
して作るつくるつくるを花なく妄想の雲
掛へきをあしく殺の家消ぬ月をあき世中に
蓮華の云へく稀なるいもとおこさあの世の
法変なるをれ初秋の色香をみを萩灯籠

麻木の脇にて索麺風呂
就を
つまをくれやうにて来るむ行の遠こあるきて
其後を及ぬ迷ひ出の地をくくを年と
出るあや踊由くの伊達深の中へ行とひとを
取るあやをくく舟風を地へ蓮華の名所なる
いくふ法華の宮と法を行て西を行者の
をくれて蓮華を出るくくらへ世法のを迷あなう
なり出るいへ芝居の蓮華に浸るのなりを
ある故実者の中へ

笠もして蓮華供るを

杖の門序

季真ハ金乃亀を解き祐乗ハ銅の猿を彫て酒にかえ宗しは風流ハ坊主なれとも酒屋ハいつこの雅趣て
かりんはさ志ら雲の路をかかる折からうつき
聖の家に文六ハ魚を志るまてする酒屋貫加はあるき
気をさなりてもを見をえて又絶くこに酒屋の嵐
月世かりハそての文字人かとよふにハみ人し
あまれたるふりく極楽の出店とはいふなるへん
姿を本の錫の法師まさなる世に得意と成
とく撰集一部をものしたるあり只是酒湯乃
まかりしを聞かるにて月花の方人と称すもさればこそ
ここに世話れ夕顔に隣まして雁（かりがね）の郷を御酒樽の

一つもあら汲壚に文君のなきこそかに菊と呼上根て
なりし人あらや悟る聞けハ七宝の星をかかやかす
菩薩の音楽を伴ひきたれるも極楽門の極楽を
あまりて杖に銭をかけく迷へる人ハ迷ひもすへし
只こゝ身の酒汲唯人の上戸と悟らん者ハなからぬ
酒屋乃酒みな醉へしとて

月花の下戸に来山子や酒喜し

與附節唐文

居堪乃西南に把茅の一庵ありそこに住る八旬
法師此比えうるのありくえつてまた其説く
因今世のうき身をとかりに菩提に心をよせる人家あれ

必佛あり我が真道とするのあらふかあらねを
咫尺の浄刹の多くて朝夕数十歩と云ふ世界を
佛が向ひまいらせんと本願いと安らかなる十万億土乃
遠きを去るもまた身の佛を作り仏像
佛像の多くてもあるべきの古来
只芭蕉翁の像一軸を刻む新に彫刻
ても我宗派あり仏遍に
芭蕉の俳諧の和歌も西遍に
讃佛乗の因となるべかりしかるに
同一なるの因なるべかりしも
教ふる昔八十年の今を思ふ我を富
まいらせ一の今を出世とのならずの

仲秋の八中へまるの月十二日の稽
為ますまき祥云の世の朝代者とする
茶団楽のまるしてまと一年に今日を
同志の友とまるしまと一巻のみ成るべんとす
新しくい屋塚下の無道の去いや仏ふるを
祭奠まるまを仏法へくいまるに報恩の志を
恢の世の我を一まるの屋をまるいまるの如く
我等き同朋の志をまるまきあまを
ふまるまを信仰を行まる訪を行まるの

墨石記

墨石あり江の高まを名づくるあり伊勢

あり虎の怖しき物なりと仏出ずるを聞き
虎を遇ふ人あり実ふる人のこゝを言へ
しかりて家山にあり射無名を乏ふてた
癒ることなるつゝまれお北の岳の高に登り
ゝて夜ゝ仏境の意ゝ物あるゝ
ゝやはの容をうたにうたうて
峯聳へ谷遠ゝく徐ふことゝゝの巖穴あり
見すつゝゝ無名の山を一語の記を詩る
ある巨灵ゝ手ふ擘き掃ふる盧公の術ふ地を
縮らかいゝ文人のいひつゝゝ精舎あり
ゝて山地に移既の名あるのゝに如言天の
遊れゝ霊場あれゝ石の洞の徐ふくゝも

十五言ゝの五を言へ
ゝふ洞を石ふ制ふ
ゝん主人のゝゝ風騒の人の洞ふ
庭居ふ言を人ふ詩ふ和ふ洞ふ見ゝ文房の
林助ゝ洞ゝ洞ふ洞ふ
波ゝ洞ふ洞ふ青色

悼子禮文

ゝゝ十人の友を失ふ人ゝ髮ゝ
ゝゝ文ゝ物ゝ一ふ
ゝ一人の友の顧ふ歯の落ることゝ
ゝ出ふ毎ふ一ゝ欲ゝ

久しく之を修子孔孟の心能力の有るあり方を
まうりぬ此老一生を風雅に寄せ其道のあふ文物を斯
殘生を風雅に寄せ世の是非を論せずうつり人の生涯といふまく
知るものと知らざる如く知るものの不問と能と
かりそめ浮世の物のうち尋常とうつり人の称嘆
せざるをうつり今や世の情のうち尋常とうつり
まして同一老の身の根一白いとうつり其
ふらいとをいふのこと

魂ちうち秋来ぬ唐はいまうつし

六十齢説

上寿は百年中寿は八十下寿は六十とかや蒲柳
の質の身のいつて六十の齢ふるうの寿の数あ
つてあるうんぬ乃ち生涯乃ち家はれる日あり
世の人の解するとおりてきわくいはりあり妻あり
男女の子あり妻あり妾あり子あり孫あり
けるとしもいつてあるとすあり只大馬は毎年
生るるはうとあるとあるに誠とこと
和合するあるとあるとく世に生れ能るあり
妻はいつて能一必ずあるかせるとして何ぞ
さるの世にはかれ古人の恥ずべしといふ我い
為ず知るすとも人のうとして笑ふらんと
六十にて人の身や年けのうち紀年

団扇頌

まろきといへる和訓はいかなる義かしらず蒲團といひ
字義によるものならし 或は扇子扱扇といふも
士大夫の玩ぶも扇解の品にあらず 媚を求めて自然
なれは俳諧の風とてこれを讃へしに女の
持物とは用ゐに在りしは蛇尾と芳香の中にて歴
蕉といへるにもあらず多くは蛇尾一曲きらめきて蝶
しきつるもきあまし 昔孫晨は菰をつかね清流にて
より藁一つ扇にあしらひ送りて家國は聖主に撰擦
めでたき世に何の用なききさきあしかまゝと定めて蝶乃
ゆあはれと憐しは蘇の竹の露ちとも云ひ鶯巻の
すゞしひなるとあまたとくおちに世のならひねぐれは

班女の扇をのこすなるくは班姫の團扇のしく
寿は必ず歳寒けらずしかも表に多く籠の枕にときに
へは寿の為めにくられとなりし強に世君おくくれ
團扇に加へてなき世の中より聯錦の由緒おぼ
ゆるなる 不用の用といふ事ありて人みな知れる
さらしがく荘子が喩へなくいへるに地に入用は
足二本といへる下に用なきを鍾て不用として地を
堀るに足二本の外に足をなし用なきといはず
定地を全うするは不用の用といへりのなりとぞ足
喩のさまなるのかくの程ちかくも理を知らしせば
人此扇の袖といへりのゝぞあらん 是を學す今團は
なかれたる今不用ともいへ是を翫ぶ徒利なれば

かきふ似るのこなすき是を右ふ露とか故ふ生を
御き擬ふへるにも自ゆのくこらきを知りとのつゐの
宝しらりてえきを語くの俤をうつゝのゐふ翅乃
おくらけぬるこそし　これをんて常ふ別く是に
んのつゐら一　まれくこひし此故を以りて
蒲巷よりあらこの知りは不用の用をさとるへしと
そこの夢をゑふとこし人待る

篆とのせく飛と趣あり東武の纒

與會聲子文

酒よく人を淫し酒又人を養ふ是非醉の上の
かゝる酒ふ酔ふや　古月茗の良由ふより酒友あるて

飲ミ友なきかれも飲ミ志学の始より四十の口ふ
至るまてく腸いは沖のみのうへくなるまゝなき生涯
なれ　昔の人ふ是ひならへくある酒と聲ふ字を
戯とあふへし　辛巳の秋、辛くふやよつて好
いれる酢の来らんのまぬいのむふ揚り醉さるを
醉よりも西白き扱を出し廿餘年の愛包務と
さめそましも世のそしつる人の諫も放花ふ作捨し
おのこの壺を碎り盡を絶きて壽もいよ／＼下たと
なりぬるを同しく業するりけれ此人の病飲せし
初よりたゝ何さらなり上戸伸なまへ　下戸まてうくたゝ
命をつくまし　く錢を惜くたらんとうくてき
そのふせらしく　く又辯をも常にしく是を施して

やま陰ま花楓の青葉より霜を経て深紅となれハ
二月の花よりも紅ゐ枝梢の濃きより其外の唱
傍ハ寒林雑木に勝れたりと上へハ生れたるの中ゐ
法場くめとの青葉に庭をもりしう好の瀧に之る
角ろうはさうは青色を静ておく今よりたれ
錦と捺し古ゐ黄茶を甘なひて再ハ昔乃
解御ゐハ跡をめくりて去へりは含静の二字ゐ頌を
誦するのしうや

賭不及法師文

てるもしの事しわゐ家持く蟷螂胡ゐいうう
やすれ白家なま頌えくと眉あうく若しさ是

中く南きか猶まへし不及法師ゐ和尚の方丈の
栖いはしたり樹下石上の身ゐ衣をされたる借庵と
いふ上のあうけり旅ゐ閑をも雨なる折々は家主の
あうえても安するに営とする事をおもへすゆ夕顔乃
まとへゐあけく銀鉄の銀ハ拾うゐ安し汲や
津梁の大恋あうは忘れしにハ神龍の雲錦の
やとりかしうく卒ゐ地中の梅ゐあり汲家知うぬ
我志うぬ

いよいよ安き心ぞ志うし　蝸牛

灌老井賦

瓜角ゐ分ち煩ても二月の初梅を献せる酒ハ

華清の池水あり玉華宮あり
山谷の間あり
源者の兵軍を助くるあり
其二の男に源出せり深井あるものあり
布袋屋の泉水あり
俳諧小路あり
水流出づ天王風祭を囃して
まるにあるむあり
名所にて年を
葛籠河朝の鉄の湯を沸し秋はやはり
月をうつす雪乃花の雪を葬るあり氷を敲く
もと普世民罪
河の西新花のまるにを見

法めたんの源者の名れもあり
さまざまの一とせ貧乏を飲ひ
さまは山井の水を其ものの
ものと思ふ所の名所を
岐阻賊 木曽岐阻 吉義方通用
信濃に無の屋敷あり
封疆の間入まり
かくの第戸
と語る法りくく
賊と作まるを
山谷と
法の西東西都の通路

[illegible]と云ふ度の作業せしは[illegible]
[illegible]家の門[illegible]
上杉福島は山中の一部領則巳矣[illegible]
文越藩東風[illegible]橋井の里[illegible]川の[illegible]
十餘人驛亭[illegible]大名[illegible]
本陣の幕[illegible]離[illegible]義馬の餘[illegible]
今は椎の[illegible]
[illegible]東[illegible]
聊の[illegible]
邦芳[illegible]
迷谷乃[illegible]詩人[illegible]

斷腸之聲の樣[illegible]傳[illegible]和尚は兼好法師の世を
遁[illegible]始[illegible]
[illegible]山中[illegible]
[illegible]
枕[illegible]朝日將軍の興[illegible]
[illegible]福[illegible]
[illegible]元服の[illegible]
故宅御料の[illegible]
旧跡楯の[illegible]
[illegible]山中の藥師
[illegible]
[illegible]人の幕

峯山脈の流れすくなる飛騨国と戸隠決
裏川あり之を合て年いまだ都に遠き頃より雷鳴
女滝の鉄いかつるまも連綿乃松い今名のみ
名ゆゑ烟の浅間山いこゝ地境のくまゝ御嶽
駒ヶ嶽ヶ原の高原とく富士見原と乗
〳〵之神の名の歌い死嫌ひの人(ミニ)巫女う
雷力い雷鳴の高名ゆゑ良材芳ち伐
ゆゑ千尺堀ヶ運ひく百姓の国と千山と駒て
洞川の流る岩ゆゑ高工の術ゆ洞く
曲家踏ゆ〳〵の貝ゆを働く地御乃乃ゆ
神風ヶ伊勢の高ゆ水い湯舟流ち芳例を猶西
ゆい風ゆあって流る世ゆ遠く鄙のゆゑ流るゆ

さるゆ、山村氏のあつ移るゆ時南文流
修神絵の明神八幡文殊別ゆ定勝寺長福寺
慶の歌高岩ゆの歌高流の峯ゆ相当の古遺根
井乃峯ゆ決ゆ〳〵ゆ流石ゆ岩
釜の橋行高川橋滑川橋横沢の橋ゆ岩岐辺と
松本ゆ分る堀ゆ加佐境に長く風雅
之石の高岩高ゆ十石峠の名ゆ橋ゆ俳諧
浮流の古板ゆ高長峠ゆ新ゆ
山月乃ゆ高い木曽新貴の風流ゆ岩新
木曽頭の風流ゆ牧いゆ市ゆ
巣高ゆ年ゆ長庵ゆ東都〳〵
稼けゆきの歌ゆ昌に製して

行者必ずこれを求むるに干瓢岩茸蕎麦
孫文佳名あり。各自の走と賞して来りの
風情又世に類なし。されど其の花色
彩又多く秋の紅葉に勝れり。抑信濃
十郡山賊豈一国の半ならんや。只是小国
属するものと絶て拙き名のつゝあり

四州亭記

展亭の西に一亭あり。四州亭と名づく。
濃江湖の景を兼ね一望の内尽る。其
一望に入るものいつくか山なる。
しかし一岳を挙げ東山に高くすゝ出なく

移文のうち名とする十二人今拙記の
為に一亭を建てこれを東山に設ける
とのつゝ無亭の中に一亭西の山にそれて
ある泡の容波濃の如く眼を驚むれば
山を出るに思ひあり。紅者の楽むべきに
理屈なきにしてこれを論せず。浮く高地の墨を時
移く方の隆を求る者は海中山の野に遠き
寂寞を求る者は筋を柱へ簾を掛く雲の
軽雲の夕を憐むに山の風景を好む者にして
仮に霊連の殿に烟霞を攀く山の寂寞を
同じ思ひ抜いていつれの賞に優むべきや
支二国一の名山にして高く人烟を絶めて

眺望は上にしるしたるごとく富士を背にして
東方の山々を人々山に登りて眺めんとすれども
山の高きに登りて眺めんとすれども
の風景をもすべて寂寞たる山にあれば
他に楼を待つ所なく山に登りて眺めんとすれども
閑雅の名画を巻舒するに似たりとうべきなり
須弥の四方を下視するごとく
二字を書したるごとく檐に掛くるに
清雅なるいとも真なるべし
もちろん同一の広の蔓に茄子紫なり
あるいは真に絶えず絶えず
慨ふかく堪えざるも辞をもってしきたりあるべく筆を
記して後の考えとす

六林文集序

鄙俗の世に沈むるものや今の縉紳の間にきこえ
東京の人にして山道に遊ぶるしるべ
彩雲の笠三韓の宮東都に渡る
我蓬なる家世一家を作るに韓人
あるいは芭蕉の句をもって
王仁の難波津のうたをもって
今見るあるべきを知らず

風流文選

あら奉るに小説やかゝるものゝ中にも俳諧
ことゝ侍るべし
さるに世の俳人とゝ
さいはゝ一只俳諧の文章に雅
繁の物まとゝ好其体を学者のゝ
いとのゝ長篇のゝ東人の文とゝ風体一のゝ
紀行の章を評ゝいとこゝろきゝとゝ
潜ゝ見とゝいはゝ蕉翁の文は正しくして俗
雅とゝ共にまとゝいやとゝ多き人の編集
十一とゝ篇のゝ所ゝ見ゝ国常国
とゝ言ゝ奉ゝ芭蕉ゝ飾ゝ如
其清ゝ至ゝ人の乃ゝ東岳
支芳の文にゝきて通ゝ十ゝ

情と深く合せゝ諸芸に備ゝ
当世男の一流の風ゝ深ゝ
ゝ拾ゝ
ゝ表根の許六は物の姿情
ゝ初を飾ゝ
ゝて雅趣の
出ゝ人の
大道ゝ
ゝ其体確
古語ゝ
あらゝ
雅ゝ
詞ゝ文章ゝ

[illegible]友護花堂の六林子の文章素こうに玉を
[illegible]を[illegible]て家業不用を[illegible]こと[illegible]の金を
過ぎに[illegible]他いさ[illegible]人[illegible]本州[illegible]の長[illegible]出し
[illegible]言を知る人の稀なる[illegible]
小判の[illegible]て白く光を世[illegible]
楽[illegible]旨[illegible]輯[illegible]
久[illegible]金業の[illegible]
[illegible]を探[illegible]
世[illegible]服を商[illegible]家の[illegible]
庫[illegible]入口の暖簾[illegible]必[illegible]
用[illegible]
暖簾地相の[illegible]

才[illegible]暖簾を掛し[illegible]
[illegible]

與吳說 為伊屋已良

和[illegible]世[illegible]昔の昔をきけ
荻川の[illegible]詩賦[illegible]
[illegible]酒屋に掛の[illegible]朝之[illegible]
燒[illegible]
風雅[illegible]
文章[illegible]富[illegible]
人の世[illegible]家業に[illegible]
連歌に好[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

截指女郎誓
挙腰祖父痾
移敷殘暑褥
脱曬有明簑
濵市初鮭貴
辻能油虫多
花開粧寺院
柳動彩溪河

後うつゝ夜寒屬より明和の末まで半掃
唐乃遺形をうつす
六林校

節分賦　八百坪記　同上健頌
殷勤塚序　節分序記　與晋流辭
寄未見舟詠　義二家賦　祭猫塚文
送曉葉辭　懷旧辭　顎像文
更幽亭記　つのかし序　釜賦
与服部文　漢和辞書序　香木記
百話亭辞　編集後序　知雨亭序記
方十園記　拾翠堂記　送月堂記
墨具乃記　松浦義記　布袋養鳳寄墨序

人を見ぬ　芭蕉翁
まやうみの　うら淋梅

世一帖と又ふ松をうる人々
ものをかく見るとも
ものの見
羅漢

浅草梅うめ衣拾遺

微分賊

こゝろ悪しき鬼のもとゝく拾ひうとて家に鞠の形拾
さし深き家大事はのるかいつくう鬼のもとゝ
あるべき昔の聖人夜に寝しく抜ふは家をつゝみ
ゆゝしき世をのれる翁の伝授ふはさまし
年を惜むの教ひ伝のつゝきまへる事とかきこゝ
中に安うれ今に拾ふ事ひきつゝるうる条
者ら男のうあ所腰ふ者れ拾うけくらきこゝろ
百ゝうちちらし者つるかきく鬼やゝひしうと者
覚へくおし年の数とゝふ拾ひく伝拾ふ者ふゝう

すきものとなくとのうちにあるにたせしよ
勝のあらいに掛りてもかの其数いたりしかハ八月廿
一日ありあるあるうちの小船をこぎ出しかの一反帆
用の方に向くとあるうち拾数人なりしてなを
山なりへとまるあるのみなるの海波の向く
おもせうちうちに仏ありこの世ふしうち
彼の老ハとへとおもれなれたるとの者なれ
一ゑれれ物いうへとやはうち
方ちうへ拾わりや物の尼ばし
梅やまく福と思ふの屋とて拾

八百坊記

二十五年にいたりの小慈義の御とて法祈建願
よりたうとをつくるのことを興隆法の御方
詩歌まこの人ハ法ハ法ハ仏法師いとをうち
我者らしとうとをつけとも夫と義のうとを民
あるハ門人のうとやあるとうとを乾坤に満とれ
永ふうとつ拾とを再ハうとを中ハ日郎
ろもやつれく家にうとを今人のあとをとれを
うとつく人の思いに法うとたうとをわうち
佛のうとを人と敬ひ拾ハうとを人を慈悲の
うとを人と迷とを只をいのうとをうとを人の拾ハ
永の為ハ女に拾ハまこの郎ハ為のうとをく
うとを人とあやまる罪なりとをうとを八百坊乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

立花の入用の須彼と称するものの枝にて
光を助け棚の蔭を驅出し蓋ふもの多く棚の果を
掛小簾と云石公の樹下の履と称し仰いで細糸の
松の羽衣と称し後世の人花の枝に掛ると
仏つくりの石のもの是を名づく実らざるもの
枝をもやはり枝へ分れ柿と称し梅を
ちきるに心の欲する所に任せ
西施の袖と称するものに及ぶ清濯乃鹽のもの
潤沢の海具まき所も色を干つへ一ものを
八所二所の所を絶し拾ふも拾ふ所の
拂ものの山吹かくていとも多し一ぬ一ものの
世に沢山なる彼物上の自生徒家名と称ひ

単論を起し海苔ものを斟酌の場に臨く能乃
多かるものを多くの板倉屋の樹木に沢山を
所へ自生徒世ことの名と称するもの

飯台塚序

竹ものを以て時長屋の社中高さ三尺
百年の塚に生ずる所の苔の色と原形不朽の姿
塚と称へ一山約長一尺と高さ三寸
原宿海苔の場より
灑くとも長流水桜の宮を
剣と長宗我部人の形成一ものみて此ものの
海苔ものの名あるは同じくいとものに長事あれし

さてはまのあらうとて收し一云の謝礼を乞んとて
社中皆云是只忘れ難き怪あり爲主其命あり
もとより我曹の知所なりとて云と答ぬ主人
人〳〵を召て問はるゝと皆云はるゝと雷聲
空生定の侍ふまで地を求め一基の石を建一堆の
塚をつくれとて皆立帰る爲主帰り来に此ものと語る
一句を語り実の此ものとも南都の
諸国を経の物語あり此ものは
定めし早計と無言る譲ふ此人を送
嵐ふ吹さまされ風うんとくもりて五の十八さの
雨ふ降らまく世あるものの遠ふ去まかり
ありに只此後号のまうけもうり百ふ一ものとうらねと

あるものの笑ふ風雅心あるの旅うらやまるし年くまの
第七とも白氏の歌ふるのうつく是ふ
しあるとも少ふ向の一句と爲も
我とうる塚の掃除ふまの事

第六 高記

りこ一ふ種怪といふ者あるく鬼を逐
ふ其家とうに眼を無し脇を搖けく
長劍を以て是実鬼に怪れつゝ是を
主人に用ふ福の神に怪我と知つひあ
かりてあるとへ人ふ帰かき我国乃

[illegible]年くの[illegible]と釈迦と[illegible]男と
[illegible]二句の文を唱へ[illegible]
[illegible]逝ちり福の[illegible]
[illegible]れを家の節分者
[illegible]福は日[illegible]釈しく[illegible]
[illegible]日[illegible]酒[illegible]
酒豪乃[illegible]
[illegible]思[illegible]
[illegible]
[illegible]者[illegible]
[illegible]
[illegible]

與晋路辞

晋路は行内某の男児二歳の初
月の事[illegible]
[illegible]歳
[illegible]

不法中年のころ[illegible]
[illegible]
[illegible]

月ハ春ハ花のなかあるゝ時ハ月ハ秋ハ
一字の間をもて万物を学せるの時切
実之の間学いつれの人か是ハ家業世代にて
ハ学ハ月ハ家ハ
故人いはく和歌に師ハ
ゝ学ハ一ハ
一法ハ
人のゝ
秘すハ法ハ
秘すハ
物ハ風
てハ
時ハ

ハ
師ハ
ハ
事ハ
才の
秘事
為ハ
五倫五常ハ
俳諧ハ
師ハ
師ハ

宇未是之孫歌
未是爾〳〵未是爾のあゝ〳〵ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海くさい風のあるく里つに風を借れば
家同志の襖屏の撫さすれば　引もく女人の
絶々の後ふ港さく故也（遠る恨の涙を広期として猶ふ
絶ることを　引もく八一富士三番に並ひさく美の
吉兆とする所ハ（遠）　深淵に舞踊
ら（遠）さく美裸の蝦蟆ふ　ふ命を活妖怪ハふ
ふさ永文笠り一隙を清帝の御時ふ時ま毒を食
清水ふ占（遠）ふ笠ふ踊り相し不祥を
捨りぬ（遠）　山椒のこ毎のわらの広沢ふ故の
初めつ絶ることの糟ふつみ　拙なのひさの糟ふつみ
金を鑑る奇ハ志さらふ　うてはをれハ
秋荒るの好ハ立るうま春ふ　大原十田中の

村の広沢ふ秋ハ果をうるあるせを高ふ
欲をかすと尺ふ世たるあるま色をく
かるうふ手家の公達を仮せるやも　ハハ
刃と省ふ一味噌ふ油ふ味ひをうて幸に酒精
乃成ることにくも（遠）ま　かくハくふ果ふ
今ハ箱ハ桜をふ　ふくるあるふしくふ
ま（遠）ハハ（遠）広の蕚に前ふ立ふ色ふ
沢をふる異の乃あるも　不風の弾ひをふ
うこるハ味噌ふ人ふ沢ふし捨ふ富乃
こやをふ如ふ果ふ鮮ふ　ふ沢ふ扇を把ふ蕚をる
ふ下ふの姿ふ立ふ沢ふ　ふ雨ふ乃長
ま毎ふ高良漬柄のふ法ふ　ふ棚ふ蔵ふ

祭嘯花文

この秋、毛利嘯花子、この度三回の長寿を祝ふこと、魂を祭り、永世の日明善の友、別し昔を忘れず、まつ身の老を於ふ、ひとしめるて文協ふ、別し去世の人を指ふ、打まして真に失せ、去るこの方者、ひとつとして、ふ、ふ、ふ

風月堂と称したる一軸をうつす歳あるの絵り紙筆と清く一句とゝむ

[illegible]

六林いとく風月堂に屋府本所書林なり此家の主義[illegible]
竹御の比立ちゝ[illegible]一句を[illegible]れし[illegible]今此横写を

印
書林風月堂
[illegible]
[illegible]
[illegible]

つのゝ序

[illegible]陵の[illegible]張氏の隠栖より[illegible]貧富[illegible]
[illegible]衣食[illegible]の氣[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]桃の茶を煮て一室に幽趣をそのはなはだ
深山麓に近くして伐木の丁々[illegible]
清[illegible]
[illegible]
[illegible]

もゝしく蒙恬といふ人始て筆を造りしより
和漢に能書の人こゝかしこに出て我邦のこゝ[illegible]大師いと
[illegible]
[illegible]
造りて和国に用ひの働をなすに今[illegible]
[illegible]
自[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の種類と我邦の六林を是一[illegible]
[illegible]一[illegible]と[illegible]
[illegible]
感嘆の餘り戯[illegible]

釜賊

森津の老農の話年の一[illegible]
[illegible]
[illegible]

是を聞く毎に[illegible]
釜屋の名を定むるの年月を[illegible]
いふ[illegible]
呼せし我が釜の加[illegible]
る者[illegible]宮の[illegible]
[illegible]
蝶松を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
茶釜[illegible]

事[illegible]
利[illegible]
信せず漫ず記[illegible]

与根息文

[illegible]濃州内津更[illegible]亭二止[illegible]雷

松の[illegible]根息[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

漢和五十音序

俳諧の漢和昔今きく毎多くなりけるこゝろ
俗語多くして一向に字をしらぬ人に為めにまぎらはしく
俳令志ある人々法式と為すべきかゝる人々稀
なるべし其奥ふかきこゝろ多くして字不出所の主人
無道不拘天新文を助けはくらんに望の中
より古き一帖を拾ひ出して根ざしを加へるに
料理法極して崖のあきにはめと味ひ安き一巻を
著すこゝろ初んの俳士の仮名
我いまだ一ッ宮の板快なるべくと撰者の
求に任せて序者を作る一語と贄とす

香木記

もろ〳〵龍の絡とあらるゝ人あり玉の龍降りて姿
を変ずるとて好むこゝろ信あまねく感恩あるの
ものにあり我家に花井某深く香木を
好むこゝろ少不楽しの人に其家ふかく
絡る向あり年経るまに庭前も殿堂も
今は要き所の物なりとて くゝきて金ホ
ものとあり しかるに彼の物はみちわら
ひいはくこゝろに実木の窟に焼る何の事ぞ
香の源のゝ たつ人ありて ものを
赤梅檀ありさまとすりぬ名人
花井四郎士

柯亭竹の笛焦尾の琴を弾るたのしみとうも
通り過らあつらえ笠おかしくめて笑むものあるを
されど何といふものの物のもあるしくその名ぞ
例られて笑ふ笑ひや久しくこの月の中ゆ薬を搗き
しやを白しけ水の玉あやあるし

白の雪や月の兎いまゝ初し

百話亭辞

金人のはと儀一抱いへて居さしのいまゝめも
はいふ人のうへ水くさ者ものあつもとを
耳と儀せるあ一ものなく耳を儀をしの角等
雅礼聴くるあ水のあの玉て紫を

清きとて度中堂の格の如く耳をとてきて
しるるへきあ水を見面に風あるを其ときあと
あきらかに拙えんく撰えあるものを俗てよあの
沼屋と称き雅清一所の諸笑ふあるとを世百話
亭かくるあるのつまくまるもくく
世ふ百物語ふるとを俗てくとを中のまにはを
くく奇怪の清とかくこたいひりくゆきを数
百ふ清るけいるるもて妖物のいるとて人りし
百話亭の名とをくく物ふの金ものも
話らんまれとて雅清の物屋あるくを数百ふ
清るけるい勝ふにの屋風のより女の前より屋
らんくく生るふ物会の所ふと霧ゆるしやく

臺和尚物出来踊り廻板動き出張棚のあらゆる
くらくらとえらくらく家格の高低を妖相の出来
あらくらく高良太の出来あるの出来ひとつ〳〵の踊り
山亭和一章の文を作るとく例の戯文を学者
見て亦世のもあり一つまらぬ面白の洒落
家人共饒舌の咎もあらんか

勝作屁洗耳序

をしめて温あるもの命ありて作品の里に
世ふるあるる水鶏塚あり哀れ世ふ其面を
幕のあるる其面と幾世一地をたるふ際
山塚とたる山塚と幕のゆゑふ第一人とたる其者

りて人に誘はれ山里に分け入る路士吟山別しつ
風雲雷雨をたるの山と生涯風雅に
時は丙申の冬立年古稀に至て涯辛
板蓋の第子沒耳哀傷のあり遠近
和歌の投句とるもの世ふ一帖を選んで第に
酒の嘆乎我もとり不出の標樂分に程共行
花もなく雪もなく月もなく聊のことを綴ふ作品
うふ求めるも風く論しく学者とつるの己に
いまるれたるといもむ口つふ二句と寄せて見
且為に具求に答るのしるを蒿里の旅日
清女の命共記さるものつるの句をとれ
かるまきの師走の月桂

知雨亭拾記

堀北の市中に於てもとより世に業を
鬻ぐ業に依て表面は暖簾を掛世風
なれども世世より塵の紛れとなんぬ
額を掛遺の掛物にて学問あるを詩賦
文章とつるまて学問の人とあるを世業
業とする吏員徐源の拾めて富貴をもとめ
らるる昔泊洙い家貧にして楽を雪んと
へつて安くて知まる今は世のこの流れに雪
ぬ一日我が迷栖を敲く物あり
こをうる致をもつて我が遺の家を
れも拾世に流るる四織遊人の撰ぶ風雅

風を好る日ありて中に世路のうるを人
保を好る響を鳥のうへとるに
れを鳥に流て流れ流れ
ぬる世に響く流れ
いれを拾しまれを家庭のもとり知雨
号もるを云て流れ流れ須日例の金毛の文をつる
拾く我が試に問文章詩が雨ぬ
拾きれる十二字をもつて遊に学問
知風完居知雨の徐
上国世臣の家よりて
父祖の縁を法人剣
年を拾に二十を世あり

[illegible]

方十園記

[illegible]

方十園とは十八十里の十あれば所あるなり反おもあれば長さ二つの間地なり案山を築きて泉を穿ちす[illegible]

[illegible]

と[illegible]園と名づけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

指峯堂記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面白き景色なり西八角より北に続き
迫りの山くさまて嶺と嶺遠く続く
只まつ一面に屏風とかこまれ
風塵の音もなく実に農業の国と成る
所乃住家いとつくすまくしかと揃て
せんさく樹木なく秋来ぬるこの頃秋稲
第五番宿 冬に来る小清水諏訪宮
こゝを過るまつ見又一宮と清水村へ入
出るこゝより海まで三里と第〇宿
迎に出る無へ長く出二宮小清水迄
情じんも所謂赤坂の辛と云裏合せの清水
赤坂より清水迄五里

第五番

森津にくしくかくして横じ義あり毎朝
いくつとなく人の国ひ
ひつまきをくいと知へくとあ
ふとくなる
長くて長くいし一宇もかりの
つまくいまて面白き所

松欲 并引

金森氏桂五郎の庭に一株の松あり此松かりく
我が一語を求るこもはなはだ求めいとあり為毎の

いとけなくて始く琴を学ぶ事五年すぎぬ。小松の
さんさんたるかげにて、歳星霜をへて、松の落葉
巣をつくる。新しき清くかぐわしきかをりを我
幼き桂子に教へ、山松の名所を教へ、
こゝに春秋をすごしぬ。
お女の琴を学ぶすがたは、山吹の
山ぶきの唱歌と四面にしたがふ。
自然の音に、ひかれ、奥あるを、
琴曲のうつくしさ、この求めに答へ、
琴の名所、まあるうつくしき
うつくしあふうつくしまだ
人をたのみ年ふりぬ

さまざまに松ぶかくうつくしき
人のうつくしきをもとめ

六朱校

補遺

布袋屋風容句集序

風雅と云へば西行宗祇の布袋屋と訪ひ来る人毎に句のあるまゝ拙き一句を記せるものを記すること二百余句にうつし一冊に満つるとなり

寛政の年の夏情あるまゝ丙午と延べて沙弥の栄は冊子の表に記すべく一冊の烏有と為せり惜しむべし惜しむべし

記すること忘れ出でくるまゝこの一帖を起草するに其の十に一てもれの一ツ二ツ漏あるべきなり

序と記すべきものなれども天保十三年の夏一度焼けい焼失し厳如茂一記録あるべきなれども句と為るべきものなれども初の夏を焼くものの寒梅こゝのあり今十年の春秋を経たるなり

花の雲やうやうとのこゝろの記

昭和癸巳庚寅の年集る古稀の一年の義也有

義乃陽氏に今年とする

天保十四年癸卯季秋寫之

桜井藏書